

氏名	猪口 純
学位の種類	博士 (比較文明学)
報告番号	甲第437号
学位授与年月日	2016年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	「多元的宇宙」の再構成——ウィリアム・ジェイムズの心的な宇宙論とその理論的背景及び射程についての考察
審査委員	(主査) 佐々木 一也 林 みどり 染谷 昌義 (高千穂大学人間科学部准教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

凡例

目次

序章

第1章 徹底的プラグマティズムの帰結——実在論への通路の発見

はしがき

第1節 哲学者ジェイムズの復権

第2節 根本的経験論の〈根本的〉たる所以

第3節 パースとの懸隔と近似

第4節 プラグマティズム徹底化の帰結

第5節 プラグマティズムから多元的宇宙論へ

第2章 複数世界論の展開——複雑性の解消から複雑性の全面受容へ

はしがき

第1節 宇宙及び世界概念の多様性にまつわる問題

第2節 〈一〉への還元——複雑性の縮減と解消の方策としての複数世界論

第3節 現象と絶対者のパズル——〈充滿の原理〉と〈存在の連鎖〉に基づく複数世界の要請

第4節 ありのままの世界の受容——外なる複数性から内なる複数性へ

第3章 多元的宇宙の相貌——経験の連続体から心的な宇宙論へ

はしがき

第1節 直接的経験と宇宙の脈動

第2節 脈動の舞台——実在の基底次元

第3節 大小様々の意識——実在の階層的秩序

第4節 創造と主体性の起源——〈私有化〉による絶え間ない統一

第4章 多元的宇宙論のシステム論的解釈——その有効性と限界

はしがき

第1節 システム論的世界観と多元的宇宙論の近似と懸隔

1 システムの概念

2 システム論的に見た多元的宇宙

第2節 精神のシステム論——〈情報〉による組織化の理論

1 〈情報〉概念に基づく精神の定義

2 二種類の梯子の交錯——進化過程と精神過程

第3節 四象限と累進的進化の構図——内面性の復権

1 連なるホロンと実在の四象限

2 平板な世界への抵抗

結章

図表

参考文献

(2) 論文の内容要旨

本博士論文の主目的は、「多元的宇宙」という W. ジェイムズの宇宙像を、彼自身の留保やためらいを越えて敷衍することである。多元的宇宙の含意が十全に展開されるとき、ジェイムズの思想圏全域——学的探求の方法であるプラグマティズムから、存在論である純粋経験の哲学まで——は統合され、首尾一貫した理論体系としての宇宙論が導出されてくる。そこに再構成される多元的かつ重層的な構造を有した宇宙像こそは、一連の論考において予告されながらも果たされることのないジェイムズ哲学の総括であり、徹底化された経験論とプラグマティズムの収束点である。

本論文では以上のことを、ジェイムズのプラグマティズムが特有の实在論（現象即实在）へ通じていることを明らかにした上で、その過程が究極的には根本的経験論のそれと一致することを確認し、これらの作業が整えた基盤の上に、ジェイムズの宇宙論的諸仮説がそれらと整合的であることを明らかにする。そして、ジェイムズ自身の多元的宇宙の描像を直接に分析し、そこにジェイムズの思索のすべてが、必ずしも当人にも気づかれぬままに集約されていることを明らかにする。

ジェイムズのプラグマティズムが多元的宇宙という像を描くことになる理由は、一般的なプラグマティズムが暗に措定された共通現実の上で「現に働いているものしか考慮しない」という思考節約の原理に依拠するのに対して、ジェイムズのそれが「現象すべてを考慮に入れる」、あるいは「何らかの効果をもたらすものはすべて相応の实在性を持つ」とする態度にあると本論文は見る。すると、ジェイムズにとって实在の総体、すなわち関係し合う諸实在とその時間的継起は、必然的に各々異なる文脈によって構成された複数の秩序のネットワークという様相を呈することになり、それは図らずも彼の根本的経験論において示唆された宇宙の複数説に一致することになる。このことは従来別々の観点から論じられたとされてきたジェイムズのプラグマティズム説と多元的宇宙説とが連続することを意味する。(第1章)

ジェイムズが論じる多元的宇宙説は、思想史上「複数世界説」と呼ばれるものの一種である。本論はそれを過去の複数世界説と対比して、過去の説が世界内部の複雑性を解消するために外在的な複数世界の存在を主張してきたのに対し、ジェイムズにおいては現前世界の複雑性はそのままに受け止められ、世界とは内在する複数の秩序、換言すると複数の世界＝宇宙によって構成されると主張するとの特徴を指摘する。ジェイムズのプラグマティズムは世界内在的な複数世界説であり、現象即实在という認識によってそれまでの複数世界説の伝統を裏返した。(第2章)

この認識の下にジェイムズ晩年の多元的宇宙論テキストを見ると、こうした多元的宇宙論が有名な主客未分化の「純粋経験」の存在論に接続していることが明らかになる。そして多元的宇宙像こそがジェイムズ哲学の総合の結果であるとの理解から三つの鍵概念が導出される。それは、個々の経験とそれを可能にする文脈との関係を意識とその流れに類比的なものと考えた「階層的次元」、ある経験の基底もまたなお一層深い次元に支持されている可能性から導かれた「階層的秩序」、そして、各純粋経験において個別に発動し、現今の秩序を形成するに至らしめた「統一への意志」の存在である。論理的概念では表現されない瞬間的な純粋経験が、我々の意識を包み込むより大きな意識の上に、階層構造をもってそれぞれひとまとまりの实在として成立する。それらは統一的秩序なく、創発的性質を持って相互につながっている。(第3章)

実は、この発想は形を変えて現代のシステム論に受け継がれていると考えることができる。システム論の概念を用いてジェイムズの多元的宇宙論を理解することも可能だ。本論はそのことを現代システム論の例を挙げ、それとの異動を明らかにすることによって示している。現代システム論の多くは複数のシステムの競合関係を描くものの、最終的にひとつの大きなシステムを形成するように構想されている。そこに各個性に依拠する統一を主張するジェイムズの独自性が見える。(第4章)

本論は、これまでむしろ無視されてきたジェイムズの多元的宇宙論がジェイムズ哲学を総合する要であることを明らかにしただけでなく、現代のシステム論へのつながりを指摘して、W. ジェイムズを再評価することの積極的な現代的意味を明らかにした。

II. 論文審査の結果の要旨

本論文の特徴と評価は以下の通りにまとめることができる。

第一に、本論文がプラグマティストのW. ジェイムズ思想の全体像を描こうとしていることを挙げることができる。従来、ジェイムズ思想は、プラグマティズム、純粹経験の心理学、宗教的経験の思想、宇宙論の形而上学が別々に扱われてきた。実用主義とも理解されるプラグマティズム思想は反形而上学の主張をも含んでいるために、西田哲学にも影響を与えた純粹経験概念や複数世界論を含む宇宙論の形而上学との連続性が理解しがたく、ジェイムズ本人も必ずしも全体の体系的連携を明確にしなかったために、相互に連続するような理解はされてこなかった。現代アメリカ哲学界を代表するネオ・プラグマティストのヒラリー・パットナムやリチャード・ローティなどはジェイムズ思想から宇宙論の形而上学を余計者として排除すべきとの解釈を提出している。だが、現代アメリカ哲学で優勢な分析哲学的発想でジェイムズを整理してもそのプラグマティズム思想の本来の射程を十分に評価できない、とする本論文の見立ては、哲学思想の可能性を追求する限り正当である。

第二に、本論文がジェイムズ思想全体が多元的宇宙論の形而上学に収斂し、それこそが全体の要となることによって一つの体系として理解可能なことを示したことである。このようなジェイムズ思想の理解は他に類を見ない独創的な解釈だということができる。このことによって、ジェイムズのプラグマティズム思想が真理論の実用説にとどまらず、その独自の实在論と相俟って、幾重にも流動化する人間の存在様態に新たな観点から迫る道であることを明らかにした。

第三に、西洋哲学の多世界論の系譜におけるジェイムズ思想の独自の位置を示したことである。プラトンの二世界説に始まり、西洋哲学の歴史上には、我々が現在その中に存在していると思っているこの世界の他に世界が存在していると考えられる思想は数多い。本論文はそれらの思想が世界の複雑性を回避するために、個々の世界がより単純な原理により秩序付けられているということを示すために構想されてきたのに対して、ジェイムズが多元的宇宙論は我々の世界そのものが内在的に複数世界を含むと主張する独自の多世界論であることを明らかにした。このことは複雑な現代文明を生きるために、整理された世界認識を基に明晰な解決への道を求めるのとは逆に、世界の複雑性をそのままに引き受ける道があることを示している。

第四に、本論文では、西田哲学が禅の体験として受け止めた「純粹経験」概念を、多元的宇宙論と連続的に理解することから、現代システム論に位置づけられると受け止める。そしてジェイムズと現代システム論の異同を明らかにすることによって、現代のシステム論が持つ射程とその限界をジェイムズ思想との相対的關係から明らかにしている。このことは現代のシステム論の進展の方向性に一石を投じることになるだろう。そして、ジェイムズ思想の形而上学的体系をシステム論として今再評価することは、ジェイムズが言う意味でのプラグマティックな意識がすべてを流動化する現代文明を読み解く重要な鍵であることを、明らかにした。

以上のような特徴と積極的に評価できる大きな利点を本論文は持っている。今後の課題としては、本論の補強のために、プラグマティズムから根本的経験論に独自につなげた本論文とは逆に、ジェイムズ自身が行わなかった根本的経験の側からプラグマティズムへ架橋する作業が必要だろう。また、プラグマティズムの後継者たちであるネオ・プラグマティストたちとの対決を行うことによって、彼らが多元的宇宙論を捨てた必然性に対してそれを復活させる必然性が上回ることを解明することも、本論の主張を補強することになるだろう。これらは本論文の筆者の次なる研究として期待される。本論文がW. ジェイムズ思想全体の統合的内容に光を当て、現代文明における積極的意味を明らかにした功績は大きい。

よって本論文は博士学位に十分に値するものと評価される。